

平成元年 1989年 創刊 No.433

# 月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年5月号



Gustave Courbet, Le Sculpteur Marcello (Duchesse de Castiglione-Colonna) | Der Bildhauer Marcello (Herzogin von Castiglione-Colonna), 1870

## 杉本純の原子力の話Ⅱ ウィーンと京都 No.166

杉本純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長）

東京科学大学が代表校を務める大学連合の2026年度「海外インターンシップ研修」説明会・合同報告会が、4月3日午後、大岡山キャンパス北1号館の会議室とオンラインで開催された。大学連合に所属する全国18大学の学生を中心として、オンラインを含めて約50名の参加があった。

小林能直教授（大学連合代表、東京科学大学ゼロカーボンエネルギー研究所副所長）より、「海外インターンシップ研修」プログラムの概要とこれまでのインターンシップ研修の成果、2026年度の募集要項の説明があった。応募資格は、大学連合参加大学に所属し、原子力工学関連の大学院に在籍していること、派遣先はウィーンの国際原子力機関（IAEA）に2名、パリの経済協力開発機構/原子力機関（OECD/NEA）に1名、派遣期間は3ヶ月～6ヶ月、経費支援は往復航空券と滞在費（30～35万円/月）との説明があった。質疑応答では、派遣生として選ばれるためには、どの程度の英語力が必要かなどの質問があった。

続く2025年度「海外インターンシップ研修」報告では、2025年度にIAEAに派遣された東京科学大学および岡山大学の学生、OECD/NEAに派遣された京都大学の学生、さらに別のプログラムによりIAEAに派遣された東京科学大学の2名の学生から、研修内容と研修成果、研修の感想について発表があった。発表に対し、海外インターンシップ派遣により、修士論文の作成や就職活動にどの程度影響があるかなどの質問があった。

今後、4月26日までの応募書類の締め切り後、各大学では第1次選抜として、5月11日までにIAEA及びOECD/NEAそれぞれ最大1名を選抜・推薦し、その後は、第2次選抜として、5月下旬までに、大学連合選考委員会において審議して、IAEA派遣2名、OECD/NEA派遣1名の候補者を選抜することになっている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の5月のイベントを紹介したい。ウィーンでは、春の深まりとともにウィーン・フェスティバルが開催される。1951年に始まったこの国際芸術祭は、演劇や音楽など多彩な舞台芸術を都市全体に展開し、戦後文化の再生を象徴してきた。歴史的空間を舞台に世界の芸術が交錯し、古典と現代が響き合う点に特色がある。2026年は都市空間を横断する参加型演出が目玉とされ、市民と来訪者が一体となる創造の場が広がる。初夏の光の中で展開される試みは、都市の文化的活力を鮮やかに示している。

一方、京都では5月、賀茂御祖神社と上賀茂神社を結ぶ葵祭が執り行われる。祇園祭・時代祭と並ぶ京都三大祭の一つであり、平安時代以来の勅祭として知られる。行列には平安のヒロインであり、由緒あるご家庭の令嬢から選ばれる斎王代が登場し、葵の葉と桂の枝で飾られた牛車（御所車）とともに、新緑の都大路を優雅に進む。供奉者の装束や路頭

の儀の進行には王朝儀礼の格式と美意識が色濃く残り、その静かな気品は観る者に深い印象を残す。沿道の人々は古都の歴史の連なりを実感し、季節の移ろいを心静かに受け止めるのである。

ウィーン・フェスティバルが現代に開かれた芸術の祝祭であるのに対し、葵祭は伝統の連続性を体現する儀礼である。いずれも5月の光の中で都市の文化を象徴的に示し、両市の歴史と感性を鮮やかに映し出している。

余談であるが、筆者は学内で開催された上記説明会・合同報告会に参加して、学生の質問に補足回答などをした。ウィーン・フェスティバルでは市庁舎前で無料のオペラを楽しんだ。京都の葵祭では、学生時代にアルバイトで行列要員だったが、父が急遽上洛したため辞退した。今月も両市の5月のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン・フェスティバルの写真を掲載させていただく。



「海外インターンシップ研修」説明会・合同報告会の様子



[Vienna Festival - Wikipedia](#)